

生活して感じた フィンランド!



松岡 宗太郎 (まつおか そうたろう)
前・在フィンランド日本国大使館一等書記官

1970年愛媛県松山市生まれ。96年北海道開発庁（現国土交通省）入庁、開発土木研究所（現寒地土木研究所）、農林水産省（出向）、道内各地の農業開発事業所などを経て、2013年3月から2016年3月まで在フィンランド日本国大使館に勤務。現在は、室蘭開発建設部農業開発課長。

1 はじめに

今年3月末に、ちょうど3年間駐在したフィンランド・ヘルシンキから帰国しました。勤務していた在フィンランド日本国大使館（経済班）では、フィンランドの経済政策や企業の分析、日本のインフラ技術のフィンランドへの展開支援、訪日観光促進イベント等を行っていました。滞在中に、仕事や生活の中で感じたフィンランドについて紹介いたします。

2 フィンランドの規模、気候、取り巻く環境

フィンランドの国土面積は日本と、人口は北海道と同程度です。森林資源は豊富にあるものの、日本と同様に石油等の天然資源に乏しいため、資源を輸入して、加工品を輸出する、日本と似た産業構造となっています。気候は、1年を通して北海道と極めてよく似ています。ただ、北緯60度以北なので、夏の日長さ、冬の日短さは北海道より顕著です。冬至の日の出は9時20分、日没15時12分、夏至の日の出は3時54分、日没は22時48分です。11月は雨が多く曇りがちなため、フィンランド人が最も嫌いな季節です。滞在2年目の11月の日照時間は1カ月でたった17時間でした。



図1 フィンランドと周辺国

地政学的には、フィンランドは中央ヨーロッパの北東の辺境に位置し、ロシアと約1,300kmの国境で接しています。1917年に独立するまでの約100年間ロシアに属し、EU加盟国でありながら未だにNATOに加盟していません。多くのフィンランド人がロシアに対して複雑な感情を持ちながら、エネルギーを含め経済的にロシアに依存せざるを得ない状況にあります。最近の経済情勢は、ウクライナ危機による西側諸国と歩調を合わせたロシアへの経済制裁と、ロシアからの逆制裁により、経済が落ち込み、EUの中でも最も経済状態の悪い国に挙げられています。国の債務残高がEUの規律目標であるGDPの60%を2015年度予算で若干超えることが議論になるなど、財政赤字については非常に厳しく対応しています（ちなみに、日本の債務残高はGDP比200%以上）。

3 困難を乗り越えるフィンランドの『良い循環』

毎年訪れる長く暗い冬や、高い付加価値税等に対し、私にはフィンランド人が工夫して生み出した『良い循環』によって、それらを乗り越えているように見えました。

(1) 長い夏休みを支える学生たち！

長く暗い冬を乗り越えたフィンランド人は、国の一大イベントとして6月下旬に夏至祭を祝います。しかし、最大の楽しみは、夏至祭後4週間から5週間の長期夏季休暇です。彼らは、サマーコテージのある地方に移動し、短い夏を楽しみます。長期休暇の間、フィンランドの経済・社会が止まることなく動いている理由の一つが、大学生の活躍です。高校を卒業すると親元から離れるフィンランド人大学生にとって、国から住居費が支給されない夏休みの2カ月間は、働かなければ生活してはいけません。大学生たちはインターシップ等を利用し、長期休暇を取っている社員に代わって企業で働きます。社員と同様な働きは無理としても、社会・経済を止めることなく前進させる原動力になっていることは間違いありません。

(2) 納税は投資感覚！

フィンランドの付加価値税は基本24%です。食料品、医薬品、書籍などには軽減税率が適用されています。2013年に付加価値税が23%から現在の24%に引き上げられた際、国民から大きな反対はなかったそうです。フィンランド人学生に付加価値税の高さについて尋ねると、自分たちが支払った税金は、大学まで無料の教育システム、学生の特権（安価な学食、公共交通機関の割引等）、待機児童（最大3カ月）はなく朝食まで用意してくれる保育園、幼児はもちろん幼児を持つ親の公共交通機関の無料化などとして、現在そして将来に必ず還元されるので高いとは思わない、という回答をもらいました。まさに、税の支払いは将来の自分たちへの投資として考えているようです。

(3) 医療費（公的機関）無料の陰で地道な努力！

フィンランドの医療費は無料ですが、風邪と診断されても薬が処方されないことが多く、歯科医院は予約3カ月待ちなど、日本と比べて医療サービスは良いとは言えません。限られた社会保障費に一因がありますが、その代わりに政府、個人レベルで、病気の予防に取り組んでいます。虫歯予防のキシリトールや、高齢者も安心して散歩できるノルディックウォーキングはフィンランドで開発されたものです。また、死亡原因を調べる解剖率は日本のその約10倍であったり、北部の都市オウルでは、ある年に生まれた全ての赤ちゃんの遺伝子を採用し、その後の病歴を追跡する遺伝子バンクを作ったりしています。医療費無料の陰で政府、国民がそれぞれ地道な努力をしています。

(4) 共働き⇒定時退社⇒豊かな生活！

一国としては少ない人口（労働力）のため共働きが一般的なフィンランドでは、保育園の迎え、晩御飯の支度等は夫婦で協同して行うことから、定時になると男女とも退社します。フィンランド全体がこのような職場環境のため、女性が安心して働くことができます。極端ですが、超過勤務の多い日本の男性の労働時間（収入）と、フィンランドの共働き夫婦の労働時間（収入）

はほぼ同じではないかと思えます。医療費や教育費の無料、公的年金への期待と、夫婦の収入によって、住宅費以外に貯金する必要はなく、得た収入は人生を楽しむために使っているように見えました。

4 フィンランドのきらりと光る『大胆な戦略』

ロシアからのエネルギー依存脱却や政府の財政支出の抑制等のため、国民は様々な負担を強いられる中、フィンランド政府は新たな経済成長分野を模索し、また快適な生活環境の整備に向けて『大胆な戦略』を描き、実現に向けて取り組んでいます。

(1) 10万年先の安全を議論！

ロシアに原油、石炭は90%以上、天然ガスは100%依存しているフィンランドにとって、原子力発電は重要な電力源です。同国では、原子力発電は二酸化炭素を排出しないクリーンエネルギーに分類され、国として当面推進の立場にあります。現在、建設中も含め6基の原子力発電所があります。フィンランドでは原子力発電の稼働直後（1970年代）から、使用済み核燃料の最終処分施設の調査・検討を始め、昨年度から建設が開始されました。世界初の試みです。使用済み核燃料は銅製の筒に入れ、地下約450mの岩盤に埋設されます。放射能が安全な領域まで減衰する約10万年後まで、どうすれば、一度埋めた使用済み核燃料が掘り起こされず、人類から忘れ去られるかを政府や専門家が真剣に議論しています。



使用済み核燃料を入れる銅製の筒（写真左）



使用済み核燃料が10万年保管される地下施設（オンカロ）

(2) データ通信版『北極海航路』！

フィンランドは地震が少なく、気候は冷涼で電力供給も安定していることから、政府は新たな成長産業としてデータセンター（サーバーを常時稼働させ、サーバーから排出される熱を処理するために、多量の電力が必要な施設）の誘致に取り組んでいます。そのインフラ整備の一環として、バルト海に光ケーブルを敷設し、フィンランドとドイツ（中央ヨーロッパ）を光ケーブルで直接結びました。さらに、フィンランドは東南アジアからインド洋、中東を通過して繋がれている現在のアジアとヨーロッパのデータ通信網（南回り）に代わって、北極海に光ケーブルを敷設し、ヨーロッパとアジア間を直接繋ぐ壮大な計画（北回り）を持っています。今話題となっている北極海航路のデータ通信版といったところです。

(3) 快適でクリーンな街を支える道路下の管網！

他のヨーロッパ諸国と同様に、フィンランドでも地域暖房が普及しています。戸建てやビルにボイラーはなく、発電所から配水管を通して送られる温水によって、部屋の暖をとります。60万人都市ヘルシンキの地域暖房は、3箇所の発電所から市内90%以上の地域をカバーし、道路下には温水用管（行き・帰りの2本）が張り巡らされています。冬に気温が零下20度以下になりますが、管には断熱材が巻かれているため、管の埋設深度は60cm～80cm程度です。漏水を検知するた



道路下に埋設されている大小の配水管

めに、管に這わせる形で温度センサーを埋め込んでいます。さらに、最近冷房の需要が増えているため、家に冷房機を付ける代わりに、地域暖房とは別配管で、海水を冷熱源とした地域冷房の整備も行っています。

(4) ノキアの復活！

フィンランド企業・ノキア（NOKIA）社は携帯電話の販売不振のため、2013年に携帯端末部門をマイクロソフト社に売却しました。「ノキアは終わった」と多くの人が思っていました。実は、同社は業績が悪かった頃から他社の携帯基地局などのネットワークインフラ部門を買収し、さらに、マイクロソフト社から得た売却益等を元手に、パナソニックの同部門の買収など経営強化を図っていました。現在では、ノキア社はネットワークインフラ部門で世界第2位の、日本国内では第1位のシェアを確保しています。元々、同社はタイヤやゴム長靴を作っていた企業でしたが、時代に応じて姿を変え、今では、モノのインターネット（IoT）で世界をリードする企業に変身しました。ノキアの完全復活です。

5 こぼれ話

(1) ミッドナイトゴルフ！

フィンランド人の好きなスポーツの一つがゴルフです。老若男女ゴルフを楽しんでいます。ゴルフができる期間は5月から9月までと非常に短いため、フィン

ランド人が考えたなるべく長くゴルフを楽しむ方法が、ミッドナイトゴルフです。夜の23時頃からスタートし、朝の4時頃に終わります。照明などナイター設備は一切ありません。ただ、真っ暗になる2時頃には、打つと発光するボールを使用します。短い夏を少しでも楽しみたいフィンランド人ならではのスポーツだと思いました。

(2) サウナ

フィンランド人が大好きなサウナ（Sauna）は、フィンランド語が英語になった数少ない単語です。どの家にもサウナがあり、家を設計するときには、まずサウナの配置から決めるといわれています。サウナは神聖な場所で、昔は出産も行われていたようです。ラジオやテレビが流れている日本のサウナとは違います。また、サウナは社交の場でもあり、企業や官庁のビルの最上階にゲストサウナがあります。諸説ありますが、サウナには何も付けずに入るのがマナーのようです。ヘルシンキで数件残っている公共サウナに、タオルを巻いて入ったとき、「お前はそれでも男か！」と叱られたことがありました。

6 終わりに

フィンランドの経済やエネルギー、防衛等の政策は『^か噛み応えがある』と、ある外交官が言われるほど大変興味深いものでした。フィンランドでの経験で、北海道の振興に活かせる点があれば、進んで情報提供していきたいと考えています。3年間海外で貴重な経験をさせていただいたことに、この場を借りて関係者にお礼を申し上げます。



22時頃に集合したミッドナイトゴルフ参加者（外はまだ明るい）